

獸

眼

コンサート会場は揺れていた。「アンコール！」の叫び、手拍子、足拍子がひとつとなり、巨大な音圧で建物を震わせる。

ステージを降りてきたばかりのリードヴォーカルは、汗でタンクトップがはりついた体にタオルを巻きつけ、喉を反らしてミネラルウォーターのボトルを傾けた。一気にボトル半分を飲み干す。

「さあ、もうひと息だ」

しゃがれた声でいって、バンドメンバーを見渡した。メンバーたちも目をぎらぎらと光らせ、無言で頷く。クスリを入れている奴もいるかもしれないが、そんなことをしなくとも二万人の聴衆を沸かせれば、充分にハイになれる。

「よし、いこう！」

リードヴォーカルが空になったペットボトルを握りつぶし、いった。アンコールを求める音圧はどんどん高まっている。

キリは、先頭に立った。楽屋までは戻っていないから、ステージの袖まで、ほんの十メー

トルほどの距離だ。通路に立つスタッフがさっと道をあける。

——手前、俺の前、歩くんじゃねえ

ふた月前、ツアーの最初の晩だった。リードヴォーカルがそうやってキリの肩をつかんだ。キリは静かにリードヴォーカルの顔を見つめていった。

——それが俺の、仕事です

聴衆を挑発することで人気をおおってきたバンドだった。お前ら皆、薄ぎたないブタだ、といわれるたびにどよめき、歓声をあげる聴衆を、ずっと見てきた。

マゾだぜ、マゾ！ いじめられて嬉しいんだろう、変態どもが。嬉しいっていつてみる、感じますっていえっ。

マイクを向け、腰を振ってみせる。言葉つかいは過激さを増し、卑猥な罵りを浴びせるたびに、聴衆の興奮度は増していく。

『マゾといわれてそんなに嬉しいか、クズだとか変態と罵られて、頭こないのか。ファンは馬鹿ばかりじゃねえの』

そんな書きこみがネットに上がり、袋叩きにあったのが半年前だ。ネット上の応酬は毎度のことながら、馬鹿馬鹿しいほど大きくなり、最後は「殺す」にかわる。互いに「コロす」と書き合い、やがては飽きていくものだ。

しかし「実行」を宣言する奴が必ず、ひとりやふたりはいて、そのプリントアウトを見せられたキリは、仕事をうけることにした。

本気がひとり、混じっている。

ステージにあがる階段の直前に、そろいの黒いTシャツを着た男が二人、立っている。きのうも同じ場所にいた。セキュリティのメンバーだ。ひとりは頭をつるつるに剃りあげ、二の腕にタトウを入れている。もうひとりは濃いサングラスをかけ、顎ヒゲをのばした、ボディビルダーのような体つきの奴だ。

キリは二人の手前で足を止めた。そこで道をゆずり、バンドメンバーが階段を登る邪魔にならない位置に動く。

リードヴォーカルがキリを追い越す。階段の最初の段に足をのせたとき、サングラスのセキュリティがナイフを抜いた。

わかっていて、お前がそうするってことを。

気づいた人間はごくわずかだった。

そのひとり、タトウを入れたセキュリティはただ固まっている。リードヴォーカルは、魅入られたようにナイフを見つめ、

「なんだよ」

と、つぶやいた。他の人間には何が起きたのか、見えていない。通路はそれほど狭い。

ナイフがサングラス男のヒップポケットからすべりでる瞬間は、スローモーションフィルムを見ているようだった。同時に、そうなることを、ずっと前から知っていたとキリは思った。

ナイフは折り畳み式ではなく、鞘から抜いた瞬間に殺傷力をもつハンティングタイプだ。

キリの左手がリードヴォーカルの革パンツの腰をつかんだ。まるでバネ仕掛けのようにその細い体をひき戻す。

ナイフが空を切った。

「うわっ」

声をあげたのはタトウのセキュリティだった。

「何すんだよ」

サングラス男がナイフをもちかえた。使い方を知っている。刃を上向きに、低い位置でかまえていた。

戦闘オタクという奴だ。情報のためこむだけでは満足せず、実際に銃やナイフの扱いや格闘技に習熟しなければ気がすまない。

かつて、オタクはひ弱と相場が決まっていた。「できないこと」に詳しいのがオタクの

定義だった。

今はちがう。マッチョで強くて、暴走するオタクがいる。

こいつもそうだ。リードヴォーカルの体を背後につきとばしながら、キリは感じた。

サングラス男は無言だった。わめいたり、すごんだりする奴より、本気度が高い。

ふっとんだリードヴォーカルが通路に倒れこむ気配があったが、ふりかえらない。この男から目をそらすのは危険だ。サングラスのせいで、しかけるタイミングもどこを狙ってくるかも読めない。

「おい！」

後方で誰かが怒鳴った。が、ナイフの切っ先が、身体を沈めたキリの頭上、喉のあった位置を払うのを見て、

「ひっ」

という悲鳴にかわった。

「何すんだ、お前」

次に聞こえたのはドラマーの声だ。

「予告したんだ、やんなきゃ」

サングラス男が口を動かした。カーテンの向こう、階段の先には二万人の手拍子や叫び

があるというのに、キリにははっきり聞きとれた。

キリは首をふった。

「もう無理だ」

キリの声も低かったが、サングラス男の耳には届いた。

「無理じゃないっ」

そのとき、タトウのセキュリティがつかみかかった。ぱっと血しぶきがとんだ。

呻いてうづくまる。腕のタトウが切り裂かれていた。

「邪魔するな」

いった瞬間、目がそれたと確信した。左腕を振る。目とナイフの動きは連動する。サングラス男の体が右を向く。利き腕の側への動きは身体を開くことにつながり、対応が遅れる。

キリは右肘を胸の前でかまえ、突進した。素手で、ナイフをもった相手と対峙したら、とにかく距離をつめる。銃とちがい、ナイフは予備動作の空間がないと効果的な攻撃が難しい。

肘打ちはサングラスそのものに命中した。狙った場所だ。レンズの破片が目かその周囲に傷をつけるのを期待していた。この一撃が決まらなかったら長期戦になる。

目を閉じ、闇雲にナイフをふり回した。そこには誰もいない。眼球は傷ついていないようだが、プラスチックのかけらが目頭のわきに刺さっている。まだ若い。二十四、五だ。

キリはサングラスを失った男の爪先を思いきり踏んだ。スニーカーは上からの衝撃に弱い。キリのブーツの踵には鉄板がしこんである。おそらく指先が潰れた筈だ。

初めて男は悲鳴をあげた。

「いけっ」

キリは叫んだ。言葉の意味に誰も気づかない。

「ステージにいけっ」

我にかえったバンドメンバーが動いた。その場から逃げるようにキリと男の背後をかすめ、階段を登る。直後、手拍子が歓声とどよめきにかわり、通路が揺れた。

男は右目だけを開いた。左目は傷ついていないが、きつと潰されたと感じているだろう。

「お前を殺す」

キリは首をふった。

「無理、無理、とおっても無理」

わざと嘲ったようにいった。

ナイフがつかだされた。計算した動きではなく、感情に任せた動作だ。それを狙ってい

た。右わきにその手首をはさみ、固めると頭突きを浴びせる。一度顔にくらった攻撃は、他の場所とちがって恐怖を抑えられない。

男はとっさに目を閉じ、顔をそむけた。

右わきをほどき、ナイフを握った手首を決めた。一瞬のひねりでナイフが落ちた。それを蹴りとばし、男の手をねじりあげるとひざまずかせ、右肩に膝をあて関節を外した。

大きな悲鳴を男はあげた。だがその悲鳴は、リードギターのうねるようなイントロにかき消された。

コンサート会場は、二機捜の管轄エリアだった。通報をうけ駆けつけた機動捜査隊員の中に金松がいた。

引き渡す前に、キリは男の肩を戻してやった。脱臼は元に入るときも激痛を伴う。

キリと男のいる楽屋に入ってきた金松は眉だけを吊り上げ、

「またお前か」

といった。キリは無言だった。部屋のテーブルに顎をしゃくる。とりあげたハンティン  
グナイフがあった。

金松は手袋をはめた手でとりあげた。

「『BUCK』じゃねえか。いいナイフをこんなことに使いやがって」  
腰を折り、すわっている男の顔をのぞきこんだ。キリをふりかえる。

「だいぶ痛めつけたな」

キリは低い声で答えた。

「手加減できる状況じゃなかった」

金松は頷いた。部屋の外に立つ部下を手招きする。

「こいつを連れてけ。あと、マル害に話を聞いとけ」

部下は男に手錠をかけ連れだした。男は部屋をでる寸前に立ち止まった。ふりかえり、  
いった。

「あんた、あいつのマネージャーか」

「ちがうよ」

答えたのは金松だった。

「こいつはプロのボディガードだ。お前は悪いのを相手にした」

男は金松に目を移した。

「俺はこんな目にあわされて、そいつは無罪放免なのかよ」

金松は男を冷ややかに見返した。

「お前みたいなのが世の中には溢れているんだよ。警察は忙しくてしょうがねえ。だから  
こいつも必要なわけだ」

男は肩をそびやかした。キリをにらみつけ、いった。

「次は失敗しない」

金松が首をふった。

「次は、お前が殺される」

足をひきずつて男がでていくと、金松は背広から煙草をとりだし、火をつけた。「禁煙」  
の表示があつたが、おかまいなしだ。

煙を吹き上げ、

「そのうち過剰防衛でやられるぞ」  
といった。

「そのときはそのときだ」

キリは表情をかえずに答えた。金松は、ふん、と笑った。

「俺はやらないがな。世の中のいかれた野郎をお前が一手に引き受けてくれるのなら、む  
しろありがたいってもんだ」

キリは金松に目を向けた。年齢は四十歳。盛りあがった肩の筋肉と潰れた耳が、長年の

柔道経験を物語っている。知り合ったのは三年前、金松がまだ麻布署にいた頃だった。

日本にきたハリウッドスターが「お忍び」で六本木のクラブにでかけ、そこで踊っていたダンサーにちょっかいをだした。ダンサーは、不良外人グループの幹部の愛人だった。

たちまち十人近いグループのメンバーが集結し、ハリウッドスターがアメリカ本国から連れてきたボディガード二人は、善戦したものの、最後は叩きのめされた。本国であれば、そうなる前に銃を抜いた筈だ。

残るメンバー全員を相手にしたのがキリだった。自らも怪我を負わされながら片つけた。

ハリウッドスターは、キリを本国に連れて帰りたい、といった。それをにべもなく断わる姿を、金松は見ている。

「まあ、いい」

金松は無精ヒゲののび始めた顎をぼりぼりかいた。

「調書をとるんで、あとで所轄に出頭してくれ」

キリは頷いた。

金松はにやりと笑った。

「お前の本名、知ってるのは、警察だけだな」

## 2

「ここぞいこ」

警察署の前で拾ったタクシーを、自宅の百メートル手前で止めた。金を払い、表通りを一本入った路地に足を運ぶ。

品川駅の港南口から少し離れた地区だった。再開発されて建った新しいビルと古い倉庫が入り混じっている。

道幅はあるものの、車や人の通らない路地をキリはひとりりで進んだ。自宅の手前百メートルでタクシーを降りるのは、習慣だった。

恨みをもっている人間に自宅をつきとめられないようにするためだ。

キリが足を止めたのは「八ツ山螺釘製作所」という看板のある家の前だった。工場兼住宅の、築三十年以上は経過していそうな、古い建物だ。看板の下のシャッターは閉まっている。

シャッターの鍵を開け、引き上げた。シャッターが上がると、中の照明が自動的に点灯した。

工場の機械類はすべて撤去され、かわりにトレーニングマシンやサンドバッグなどがおかれている。それでも足を踏み入れると、機械油の匂いがぶんとキリの鼻にさしこんだ。コンクリートの床にある黒い油染みのせいだ。

工場の奥が住居部分で、十坪もないような小さな家だった。

キリはブーツを脱ぎ捨て、畳のしかれた住居部分の居間に寝ころがった。瞬きもせず、天井を見上げる。

この工場兼住宅を借りて、じき五年になる。その時間は、キリが個人でボディガード業をするようになった期間と一致している。

ニャア、という鳴き声が聞こえた。黒猫が工場部の暗がりをはげだし、歩みよってくる。闇の中からたつた今生まれたかのようなうだ。

キリは首だけを動かし、黒猫を見た。指一本動かすのも億劫だった。異常な緊張がほどけたあとの、激しい倦怠感が体を重くしている。

猫はキリが上半身を横たえた居間と土間との五十センチほどの段差を軽々とジャンプし、畳の上に乗った。

キリの着る、革のライダースジャケットの脇の部分に体をすり寄せ、畳を爪でひつかいた。

キリは再び天井に目を戻した。軽く目をつぶる。ぱりぱりという猫のたてる音が、むしろ心を落ちつかせた。

どれくらいそうしていたかわからない。わずかだが眠っていたようだ。

体を起こし、ジャケットを脱いだ。居間の奥の廊下になると、正面にある風呂場に入った。古いタイル貼りの浴槽に湯をためる蛇口を開く。

居間の中央にあぐらをかき、湯がたまるのを待った。目の前には、円形の卓袱台がある。

この工場兼住宅の持主は、街金の追い込みに耐えきれず、夜逃げ同然にここを捨てていった。その街金から無期限で借りる約束をキリはとりつけている。命を救ってやった報酬だ。

機械類を撤去した他は、水回りの一部に手を加えただけで、そのまま住宅を使っていた。

古いモルタル家屋には使い勝手の悪い部分が多くあったが、昭和の家庭の匂いが残るこの建物を、キリは好きだった。

卓袱台の上にはパソコンがおかれている。

電源を入れ、立ちあげると、何通かのメールが届いていた。

キリを雇おうとする人間にとって、メール以外の接触手段はない。キリのホームページは、ひどくそっけないものだ。それでもクライアントになった者たちの口コミで、警護依頼はひっきりなしにくる。



キリは届いているメールを読んだ。仕事のオファーが二件あった。一件は、一年以上の長期間にわたる可能性があり、すぐに断わりのメールを打つ。長期間の身辺警護は、個人には限界がある。キリがうけるのは、最長でも三カ月以内の短期警護だ。

もう一件は、一週間、という短期の警護依頼だった。

依頼者は、企業ではなく個人。「河田早苗」と記されている。

『ある方からKIRIさんの評判をうかがい、突然ですがメールをさしあげます。身辺を警護していただきたい方がおります。ご本人はその必要性をご存知ない状況なのですが、明後日から一週間、警護をお願いしたいと思います。当方の依頼をおうけ下さるなら、詳しいご相談をいたしたいと思いますので、メールのご返事をいただくか、当方の携帯電話までご連絡をちょうだいしたく、お願い申し上げます』

携帯電話の番号がつづいていた。

浴槽に湯がたまったのを知らせる電子音が聞こえた。

キリはキイボードを叩いた。相談の日時を決めたい、という内容だった。送信し、その場で衣服を脱ぎ捨てると、浴槽に体を沈めた。

風呂からあがり、ノンアルコールビールの栓を抜いた。仕事が完了した日には、あまり

酒を飲まない。ことに今日のように戦闘した日に飲むと、際限なく飲んでしまう危険がある。酒には強いが、クライアントに会う可能性がある明日、二日酔いにはなりたくなかった。

携帯電話が鳴った。ライダーズジャケットに二台の電話が入っている。そのうちのひとつをとりだし、耳にあてた。

「はぐ」

「キリ？ 雪葉。今どこ？」

「家だ」

「でてこない？」

居間の柱にかけられた振り子時計を見た。午前零時を数分回っている。

「どこだ」

「白金のバーにいる」

雪葉は、以前警護を請けおったタレントのスタイリストをしていた女だ。

キリは息を吐いた。さつきまでの倦怠感が消えている。このままでは眠れそうにない。

「わかった。いつものところか」

「今日はその上、三階。いつものところは今日、休み」

いわれて、日曜日だったのを思いだした。

「今からいく」

「やった」

雪葉との関係は、三年近くになる。キリから連絡をとることはほとんどない。たいてい雪葉のほうから電話がかかってくる。

室内着を兼ねたスポーツウェアにライダーズジャケットを羽織り、キリは土間に降りた。並んでいるトレーニングマシンの陰に、原付バイクがおかれていた。壁に作りつけた柵からバイクの鍵をとると、キリはシャッターを引き上げた。

バイクを押して家の外にだし、シャッターを降ろした。ハンドルに吊るしてあったヘルメットをかぶり、バイクにまたがる。

白金まではずぐだった。

日曜日の深夜、客を求めるタクシーだけが東京の道を疾走している。赤い空車ランプの数の孤独が、暗いビル街に風を舞い起こしていた。

パタパタと音を響かせ、キリの原付バイクはプラチナ通りという通称の坂を下った。華やかさと佻しさが同居した奇妙な街だ。裏に一本入れば、広い邸宅と安アパートが混在している。

坂の中腹でバイクを止めた。角を曲がったところに細長いビルがある。一階から四階まで一フロアに一店舗、飲食店が入っている。外壁にとりつけられた袖看板で明りが点っているのは、三階だけだ。

ビルの外階段をキリは登った。エレベータはない。

「Third」とそっけなく書かれた扉を押した。一九八〇年代に流行ったフュージョンサウンドが流れている。ジョージ・ベンソンの歌声をもつても、店内にこもった湿気を吹きはらうことはできていない。

「いらっしやい」

カウンターの中に立つ、口ヒゲの男がいった。隅にひと組のカップル、中央に雪葉だ。雪葉は酔っていた。ライダーズを脱いだキリに口を尖らせた。

「また、そんなヤンキーみたいなカッコして。少しはお洒落しようよ」  
キリは肩をすくめた。

「お前とたいしてちがわない」

ジーンズにパーカーという雪葉の隣に腰をおろした。

「ぜんぜん、ちがう。わたしは普段着風のカジュアルコーデイナー。キリは、ただの寝巻じゃん」

「お前どちがって、お洒落で商売してるわけじゃない」

「何、飲まれます？」

口ヒゲの男が訊ねた。

「ジンジャーエール、あれば辛口を」

「あります。レモンかライムは？」

キリは首をふった。雪葉の前には、ライムのスライスを盛った皿とテキーラのショットグラスがおかれていた。

「カンパニー」

ジンジャーエールを手にしたキリに、雪葉はショットグラスを掲げた。

「仕事だったの？」

「ああ。今日、終わった」

「じゃ、オフだ。どっか遊びいく？」

パーカーの前を盛りあげる胸をキリの肘に押しつけ、雪葉はいった。十代の頃、ファッションモデルをめざしたが、身長が少し足りず、バストが余分にありすぎたのであきらめた、というのが雪葉の口癖だ。来年、三十歳になる。

「いや、明日は打ち合わせだ」

「つまんないの」

「暇なのか」

「まあね。ファッション誌は広告入んなくて、ボロボロのところが多いからね。キリ、秘書雇わない？」

キリは口に運びかけたグラスを止め、雪葉を見た。

「必要ない」

雪葉は唇をすぼめた。

「キリさんて、渾名ですか」

口ヒゲのマスターが訊ねた。三十七、八でキリと同じくらいの年齢だ。

「不明！」

答えるより先に、雪葉がいった。

「本名も年齢も非公表。通称はキリ。K I R I。変な奴なの」  
マスターは苦笑した。

「お仕事は何を？」

「それも非公表だ」

キリは先回りしていった。雪葉をうながす。

「いくぞ」

「うん」

素直に雪葉は頷き、ストールをすべり降りた。かたわらにおいたバッグから財布をだす。

「ごちそうさま」

店の扉を押し、キリは先に外にでた。勘定を終えた雪葉が踊り場に立つと、訊ねた。

「どこいく？」

雪葉は上の階を目で示した。

「四階、休みなんだ」

「いいのか」

「うん。待てない感じ」

二人は階段を登り、四階の踊り場にあがった。ビルの横は、広い庭のある豪邸で、その向こうがプラチナ通りだ。豪邸の明りはすべて消えていた。

雪葉がジーンズとショーツをその場でおろした。踊り場の手すりに背中を押しつける。

キリは手すりをつかみ、強度を確かめた。安全を確認すると、スポーツウエアのパンツを脱いだ。

「先に舐めるか」

「今すぐ入れる」

雪葉が低い声でいった。目がきらきらと輝いている。欲情すると雪葉は声が低くなる。

キリは雪葉のむきだしになった右脚をつかんだ。大きく開くと、踵を手すりの上にのせた。雪葉の喉から喘ぎ声が洩れた。

「痛いか」

「平気。体やわらかいもん。早く」

キリはパーカーの中に手を入れた。Tシャツの下のノーブラの胸をつかんだ。小さな乳首がはちきれそうなほど尖っている。

雪葉は左手の甲を口にあてた。眉間に皺をよせ、泣きそうな顔になっている。

「ずっと会いたかったんだよ」

さらに低くなった声でいった。一瞬間が歪んだのは、キリの指が乳首の先をこすりあげたからだ。

「それに心配だったし。何かあったらどうしようって」

「そうしたら次の相手を捜せばいい」

「馬鹿」

雪葉はいつて右手をキリの首すじにかけ、耳に唇を押しつけた。

「早く」

左手をキリの下半身にのぼした。固くなった部分に指をからめ、ひっぱった。

キリはされるがまま、雪葉の薄い鬚りの奥へと押しあてた。潤っていたその部分に先端があたると、雪葉は両手でキリの腰を引きよせた。

あつ、という小さな叫びを雪葉はあげた。奥へとキリが侵入していくと、左手の甲を再び口にあて、皮をかんだ。

「もう駄目、いっちゃう」

数回動いただけで、全身をこわばらせ、雪葉はささやいた。

「いけよ」

キリはいつて動きを早めた。そうしながら雪葉の脚と腰を支えてやった。いった直後、力が抜けて転ぶのを防ぐためだ。

雪葉が体を反らせ、キリの腰に指先をくいこませた。一瞬動きを止め、再びキリは体を動かし始めた。

「駄目だよ、駄目だよ」

泣き声を雪葉はあげた。

「まだ駄目だつて。じゃないと、あつ」

びくびくと体を痙攣させる。キリは容赦なく、雪葉を突いた。

途中から雪葉は言葉を口にしなくなった。手の甲をかみながら、いくたびに体を反らし、苦しげに息をしている。

十度近くいったあと、雪葉は涙目になってキリを見た。

「今日、やりあつたの？」

「なぜだ」

「だつてキリ、いけないもん。誰かと殴り合つた日つて、強いけどいけない」

「ああ」

キリは背中をのぼし、プラチナ通りを見やった。下半身の一部分だけが熱をもち猛つていいる。ひきかえ頭の芯は、妙に冴え冴えとしていた。酒を飲むと度を過してしまうのも、

同じ理由だ。

「いいよ、じゃあ」

雪葉はかすれ声でいつて、脚を手すりからおろした。

「これ以上したら、あたし壊れちゃう。だから——」

キリを口に含んだ。確かめるように舌を使ったあとは、喉の奥まで入れ、激しく首を振

り始める。

キリは、プラチナ通りから、目の前の邸宅へと目を移した。庭の中心に池がある。瓦屋根の古めかしい日本家屋だ。二階建てで、おそらく住人は二階で眠っているのだろう。

まっ暗な、その建物の二階に一瞬、明りが点った。起きたのか。

窓辺のカーテンが揺れたような気がした。こつちを見ているのかもしれない。

が、次の瞬間、キリの背中を快感が駆け昇った。キリは目を閉じ、雪葉の口の中に遊らせた。雪葉が喉の奥で甘い唸り声をたてる。目的を達した充実感がこもっていた。

唇を離すと、雪葉はまくったパーカーの裾で、キリの体をぬぐった。

「カジュアルコーディネートがタオルがわりか」

上目づかいにキリをにらんだ。が、ていねいにぬぐいつづける。

「今度こそ、オフはどっかいこ」

立ちあがった雪葉はいった。

「考えておく」

答えて、キリは眼下の邸宅を見た。二階の明りは、いつのまにか消えていた。

### 3

一週間の短期警護を依頼してきた河田早苗は、品川のホテルを打ち合わせ場所に指定した。それもカフェテラスなどではなく、ゲストルームをとるので、フロントで部屋番号を確認してもらいたい、という内容のメールをよこした。

キリは黒のスーツに黒のハイネックセーターという服装で、指定されたホテルに向かった。

ボディガードには、目立っていい場面と悪い場面がある。

目立つボディガードは、警護対象者に安易な接近を許さないのが任務だ。人に知られた芸能人やスポーツ選手など、話しかけたりサインを求める、あるいはただ触れてみようとする者をしりぞける。

したがって、外見からして威圧的で、恐ろしい印象を与える風貌や服装が望ましい。

目立ってはいけないボディガードは、世間に顔を知られていない対象者の警護だ。

たとえばの話、ただのサラリーマンにしか見えない人物に、いかついボディガードがついていたら、むしろ周囲は好奇の目を注ぐ。したがってキリもスーツを着けネクタイをし

めて、なるべく警護対象者と雰囲気の違いが生じないように気をつかう。

難しいのは、今日のような事前の打ち合わせの際の服装だ。

ボディガードという職業の特性上、クライアントとなる人物なり組織は、キリに対してある種の威圧感を求める傾向が少なからずある。見るからに強そうである、とか、体格がいかに屈強である、という印象を望んでいる。

集団によるボディガードを業務とする警護会社は、そうした外見を重視した採用基準をもっている。

初対面で、キリを頼りなさそうだと判断したクライアントがいなかったわけではない。

「不測の事態」に備えたいというクライアントほど、その傾向がある。

キリは、無理には自分を売りこまない。そうしたときは、複数の屈強な社員を抱える警護会社の名を教え、帰ってきた。

キリを雇いたいクライアントは、たいていの場合、「不測」ではなく、確実な危険を予測している。

脅迫状、あるいは危害の予告、さらには過去、身体に危険を感じた経験のもち主が、キリを頼ってくるのだ。

身辺警護の基本は、「危険の回避」である。クライアントを、身体生命の危険が生じる

状況におかなくことが、職務の第一歩だ。

そのためには、公共の場に身をさらさないとか、所在地や移動のスケジュールの秘密を保つ、といった必要条件がある。

しかし、確実に危害を及ぼそうという意思が存在する場合、この基本にしたがうと、事態は長期化する。

対象者の居場所がわからないからといって、危害者が永久に襲撃をあきらめるといふ保証はない。「今ではない、いつか」を胸に秘め、一年後、あるいは十年後に、決行するかもしれない。だからキリは長期の仕事を請けおかない。個人では限界があるからだ。

そこで、キリはあえて襲撃を待ちうける方法をとることがあった。反撃し、二度と同じ考えをもたないようにさせる。

これには決して失敗は許されない。失敗すれば対象者は心身に傷を負うか、最悪の場合、死亡する。

キリは、自分の警護方法をまずクライアントに説明する。そしてこのやり方に不安を感じるならば、警護はできないと告げる。

クライアントは必ず、訊ねる。

「今までに失敗したことはありませんか」

ありません、とキリは答える。

河田早苗も同じ質問をした。

「今までにクライアントが怪我をしてしまったことはありませんか」

部屋は二十二階のスイートルームだった。応接セットのおかれたリビングで、キリは河田早苗と向かいあっている。窓からは、品川駅とその東に広がる東京湾が見おろせた。

河田早苗は、白髪を短くまとめた六十代の女性だった。小学校の校長を思わせる、野暮つたいスーツを着て腰かけている。

かたわらに五十代の初めの男が立っていた。眼鏡をかけ灰色のスーツを着けて直立不動だ。この男は、キリが部屋を訪ねてから、ひと言も口をきいていない。

河田早苗は名刺をだすわけでもなく、ただ「河田です」と名乗っただけだった。そして向かいあうと、キリに身辺警護の方法について訊ねたのだ。

クライアントが正体を明したがらないのは決して珍しいことではない。

ストーカーじみたファンがつくような著名人ならともかく、一般の人間がボディガードを必要とするのには、必ず「事情」がある。

その「事情」には、たいていこみいった人間関係や金銭にまつわる怨恨が混じっている。

そうでなければ、身辺に危険が及ぶとは、ふつうは考えない。

いいかえれば、恨まれる覚えがあるからこそ、ボディガードを雇うのだ。

したがって自分のそうした「事情」を話すのに口が重くなるのは当然ともいえる。

無論、キリはそういった「事情」を詮索しない。ただし、危害者が、どういう類の人間であるかについては、できるだけ情報を得ることにしている。

素人が襲撃を考えているならば、それはさほどの脅威とはならないが、人を雇ってまで「恨み」を晴らそうとしているとなると、状況は異ってくる。

「ありません」

キリは答えた。河田早苗は、ひどく小さな声で話す。外見通り、学校の先生ならば、こんな小さい声では話さないだろう。

「では、あなた自身が怪我を負われたことは？」

「それはあります」

「大怪我をされたことがありますか」

「は、」

河田早苗はキリを見つめた。声に似合わず、その視線はまっすぐだった。声が小さいからといって河田早苗が小さな人間というわけではないようだ。



「警護していただきたいのは、十七歳の女性です」  
やがて河田早苗は切りだした。

「明日から一週間、昼夜を問わず守っていただきたいのです。可能でしょうか」

「それは可能です。しかし、先ほど申しあげたような方法でいいのですか」

キリは訊ねた。

「はい。その人は、まちがいなく生命に危険が生じる状況にあります。ですからキリさんにご依頼するのです」

「立ちいったことまでうかがうつもりはありませんが、その女性は芸能界とかそういう仕事をしている人ですか」

「いいえ」

河田早苗は首をふった。

「何もしておりません。高校も一年ほど前に中退いたしました」

「すると交友関係から、誰かに狙われるような事態になったのですか」

「その方の交友関係に、わたしは一切関知しておりません。警護をお願いするのは、まったく別の理由です」

河田早苗は答えた。対象者は河田早苗の娘や孫といった、身内ではないようだ。

「ではなぜ、警護を必要とするとお考えになるのですか」

「それを今、お話ししなければなりませんか？」

キリは無言で河田早苗を見た。強い視線が返ってくる。

「無理にお話しにならなくても結構です。ただ私が知りたいのは、危害者が素人か、そうでないのか、という点です」

「そうでないとは？」

「金で雇われて人を傷つけようとする種類の連中です。暴力団、あるいは外国人の殺し屋といった」

「素人とそういう人で、警護の方法はかわるのですか」

「かわります」

キリは答えた。

「説明していただけますか」

キリはわずかに間をおき、口を開いた。

「素人が誰かに危害を加えようとするとき、その場所と手段は限られてきます。たとえば危害者と警護対象者に交友関係があったとすれば、職場、自宅、通勤の途中といったところで襲撃しようと考えます。となると移動手段を車にすれば、通勤途中での襲撃は避け

られます。職場は、被害者が同僚でない限り、素人には簡単に入りこめない。自宅も同様で、来訪者や戸閉まりに注意することで、たいいていの被害者を防ぐことができる」

「でもそれではキリさんがおっしゃったような警護はできないのではありませんか」

「それは、先ほどいわれた、一週間という期限にかかわってきまず。一週間の乗りきれば、その後は襲撃されないというのであれば、無理に反撃をする必要もありません」

河田早苗は息を吐いた。

「正直をいえば、わかりません。一週間の過ぎても、もしかするとその女性に危害を加えようという人はいるかもしれません」

「それならば俺ではなく、複数の人間を抱える警護会社に依頼をすべきです。俺にはその女性を一生守ることはできません」

「わかります。しかしこの一週間が一番大切なのです。一週間は、たぶんキリさんがおっしゃられたような“素人”ではなく、もっと危険な人たちがその女性に危害を加えようとすると思います」

キリは黙った。河田早苗は言葉をつづけた。

「まずは一週間、その女性を守っていただけませんか。それを過ぎてからは、改めて考えるということ」

「もうひとつお訊きします。その女性は何らかの形で犯罪にかかわっていますか。俺が知りたいのは、その人が犯罪組織の関係者であったり、以前仲間だった人間に狙われている、という可能性です」

河田早苗は首をふった。

「そういうことはありません。その女性を狙うのは、たぶんお金で雇われた人たちだと思います」

奇妙な話だ。犯罪にかかわってもいない十七歳の少女を、金で請けおうプロが狙ってくるという。

考えられるのは、その少女が、これから大きな犯罪を告発したり、裁判などで証人になる、という可能性だ。

しかしもしそうであるなら、警察が保護にあたる筈だ。

「警察には相談しましたか」

「いいえ。たぶん警察は動いてくれません」

河田早苗はきつぱりといった。すると、告発や証言をおこなう立場にあるわけではないようだ。

「納得されないのはわかります。でも今はこれ以上申しあげるわけにはいかない事情があ

るのです。確かなのは、明日から一週間、その女性は、プロの殺し屋のような人たちに命を狙われるということです。それを防いで下さるのは、キリさんしかいらっしやらないとわたしは思っています」

河田早苗は、かたわらの男をふりかえった。男は小さく頷き、足もとにおいていたジュラルミンのアタッシェケースをとりあげ、テーブルの上においた。

「ここに三百万円、用意しました。一週間、無事守っていただけたら、あと四百万円、用意いたします」

通常のキリのギャランティの十倍だ。一日百万円払う、といっているのだ。

キリは河田早苗を見つめた。

「こうした仕事は、一度うけた場合、途中で放棄はできないと俺は思っています。ただし、これまで話されたことに嘘があった場合は別です。警護対象者が犯罪に関係しているとかかったときは、すみやかに警護をやめ、警察に通報します」

犯罪者を守れば、それは犯罪になる。その危険は決しておかしてはならない。

河田早苗は頷いた。

「それでけっこうです。引き受けていただけますか」

「一週間という期間限定であれば」

河田早苗はほっと息を吐き、アタッシェケースをキリの前に押しやった。

「ありがとうございます。この中に、警護していただきたい方の住所と名前を書いた紙が入っています。あとは直接、キリさんがいって下さいますか」

「その人は、俺が警護にくる、というのを知らないのですか」

「はい。でも、拒否はしないと思います」

異例ともいえる依頼だった。当の本人が、身辺警護の必要性を強く認識していない、ということになる。

「もし、その人が拒否したら？」

キリは訊ねた。

「拒否はしないよう、わたしからも頼んでおきます」

キリはアタッシェケースを開いた。封筒に入った現金と一枚の紙が入っている。

『森野さやか 東京都港区白金六―二〇―×』

「これが自宅ですか」

「はい。その方は、そこで母親と二人で暮らしています」

「わかりました」

キリは紙を折って、ジャケットの内ポケットにしまった。

「今日のうちにこの人に会ってみます。それで依頼をおうけができるようでしたら、改めて費用をいただきます」

アタッシェケースを閉じ、河田早苗に返した。

「たいへん大事なことです」

不意に河田早苗は声を大きくした。今までの小声が嘘のようだ。

身をのりだし、キリの目を真剣な表情でぞきこんだ。

「森野さやかさんを守ってあげて下さい。この方の身には、たくさんの人の未来がかかっていますのです」

「たくさんの人の未来？」

キリは河田早苗を見返した。

「これ以上は申しあげられません。でも本当のことです。どうか、わたしを信じて下さい」  
ボディガードを雇いたがる人間に、あたり前の人生を送っているような者はいない。キリもたいていのことでは驚かない。

しかし、河田早苗の依頼は、いくつもの点で、これまでにうけたどの仕事とも異なっていた。

「とにかく、この森野さんに会ってみます。判断はそれからということ」

キリが告げると、河田早苗は息を吐き、背をソファに預けた。

「わかりました。ご連絡をお待ちしています」